

10. 地域の病院と連携した臨床栄養教育および実践報告

人間健康学部健康栄養学科 藤岡 由美子

(1) 活動内容と成果

国際栄養士連盟が新しい栄養管理と記録の手法を国際標準として普及することを決議した栄養ケアプロセスを、自身が開発したアプリケーションソフトウェアである「栄養ケアマネジメントシステム」に追加する作業はまもなく終了し、完成後は2020年度に導入されるLMS (Learning Management System)に掲載し、約50病院で約80名の実習生が同時期に行う臨地実習期間中、実習生の日誌の交換、報告書の提出や質疑応答をオンラインで行う。指導管理栄養士に実習生に関するアンケート調査を行ったところ、ほぼ全員が通常業務に追われる余り十分な指導を行えていない歯痒さを訴えると共に、大学の事前指導の強化を要望する声が挙げられた。そこで病院栄養科の体制や方針の差に配慮しつつも、学生間の不利益とならない程度の実習内容の均一化が望まれると共に、学生が本学の教育方針である自主独立の精神に則った望ましい実習態度の醸成を図るための教育映像を作成し、病院管理栄養士に配布すると共に上記のe-learningシステムに掲載する。完成後は視聴前後の学生の評価を、学生には実習の理解や意欲の向上が図られるかどうかの自己評価を行う(病院編の予算は本経費で使用し、不足分の在宅栄養管理編の予算は外部資金を申請中)。

COVID-19感染拡大予防から、3月より臨地実習の中止や中断が相次ぎ、8~9月の臨地実習開催は未定である。しかし、万が一臨地実習が実施できない場合には、本映像を用いたオンラインでの代替実習を視野に入れている(写真1、2)。

管理栄養士養成課程におけるモデルコアカリキュラムは、日本栄養改善学会が養成教育における総必修教育内容の70%を共通化するために提案されたもので、臨地実習には21項目の到達目標が記載されている。臨地実習後の学生の主観的評価(到達目標を「説明できる」から「説明できない」までの4段階で評価)と、病院管理栄養士による客観的評価との相関を検討した。指導者に比して学生の自己評価が低く、学生の自尊感情の低さが示唆されていた。

孤食と共食の食環境が食生活や人間関係構築に与

える影響については、共同研究者による統計解析中である。2011年までの総説を中心とした先行研究と比較するため、2012年以降の幼年期から老齢期までのライフステージ別に文献レビューを行った結果を先に報告する。



写真1 オンライン報告会(臨地実習Ⅱ)



写真2 オンライン栄養指導(臨地実習Ⅳ)

(2) 成果の公表(活動発表・論文執筆等)

- ・ Journal of The American Dietetic Association (栄養ケアプロセスの授業実践報告)投稿予定
- ・ Journal of Nutrition Technology(臨地実習の学生の主観と指導者の客観的評価の比較)投稿予定
- ・ International Journal of Human Culture Studies (孤食と共食の文献レビュー)投稿予定